花。時々、大嵐。

山際サキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
花。時々、大嵐。

【Ｎコード】
Ｎ４６３７Ｃ

【作者名】
山際サキ

【あらすじ】
今まで全然意識していなかった、何かが動き始めた。友達だった、中野が友達以上恋人未満という微妙な関係になる。中野と私のラブラブ宣言がうわさで回ったりして、関係が崩れ落ちてしまう。が――――。

LOVE：1　私と後輩

大好きだけど、大嫌いな気持ちって
皆もってないのかしら？

私は以前まで、恋は大嫌いだった。だって、恋なんてしても叶ったこともないし。でも、今は違う。恋の持つ、すべての感動にあこがれている。人を愛することの素晴らしさとか、思いが届いたときとか、愛していた人が死んでも心の中にはずっと生きているとか。
恋するときってなぜか、小さい頃のような気持ちになる。無我夢中でおもちゃで遊んでいたとき――――スーパーボールがどこかへ飛んでいったときにあれを追いかける楽しさ――――何かの衝動に駆られて体が勝手に動き出してしまうのだ。

なぜそれが分かるのかって？
だって、今恋をしている真っ最中だもの。

＊＊＊＊

「めーーーん！」

「こてー、めん！」

ぱっと見地味な私が入っているのは、剣道部だ。青春丸つぶれ。だって、防具はくさいしお金はかかるし、見た目はイマイチ。もてる感じでは無さそうな事ぐらい分かるだろう。初心者で始めた剣道だが、結構面白いし、今は部活一筋となっている。新人戦で3位という結果を残すこともできたほど、初心者で始めた私の成績は想像以上。

そんな剣道部にいる、私と同じ初心者で初めた中野はなんでもはなすことができる奴だった。でも、今はなぜか視線がそっちへ行ってしまい意識がさまよう。

「せーんぱい！元気ないですね。あ。恋の病って奴ですか？！」

「冗談もほどほどに・・・。だけど実際はそうなのよ。恋の病。」

「そうなんですか。私なんて、愛人的立場ですよ。だって、私が今付き合ってる人には、きちんとした彼女がいるんです！でも、彼女には飽きてきたみたいで・・・。それで、私と付き合ってるんです。私は、きちんとハッキリさせてもらいたいんですけど・・・なかなかできないみたいです。困っちゃいますよ。それで、中野先輩のどこが好きなんですか？！」

「え・・・・・？」

時計を見た瞬間に、長針が動いた。

「なんでわかるの。」

ありきたりな質問を返してみたけど、後輩の操（みさお）はきちんと返事を返してくれた。

「だって、先輩見てたら分かりますよ。少し照れた感じで、話した

りしてるじゃないですか。単純！」
息が詰まった。顔が赤くなったのが感じられるほどだった。照れ隠しに何かしたかったが、いじり回す物もなく結局は後輩と2人向き合ったまんまでいた。
「本人もきずいてるかな・・・。」
私たちは、しばらく黙ってしまった。

LOVE：2　怪しい操

「何で剣道部に入ろうと思ったの？」
「いやー、拓海が剣道部に入りたいっていうんだ。だから、俺も入っただけ。理由なんて、そんなもんしかねーよ。」
「中野って、以外にもフラフラしてるんだね。」
「そりゃ、どういう意味だよ。」
「自分で考えなさい。」

初めて、中野としゃべったとき。あのときの胸の高鳴りと、自分のことをさらけ出してしまう自分が信じられなかった。男の子を前にすると、皆そうなるのかと思ってたけど――――。それが、特別な感情の起こりだったみたい。
太陽にも負けないくらいの笑顔が、かわいいなと思っていたのは前からだけど私が中野に恋してるって、初めてきずいたのはだいぶ遅かった。

中野は、目がくりっとしてて顔の輪郭はスッとすっきりした感じ。髪型は、風になびくぐらいの長さ。それと正反対な私は、中野に見合う？目はひとえで、顔だけはやや丸っこい感じ。髪の毛は肩下まであるけど・・・。あの人の好みというものが分からないし、私は迷うばかりだ。

「先生！今日の部活って何時に終わるんですか？」
「いやー、今日は何時に終わるかわかんないね。みんなの集中度しだいだな。」
と、先生は言って笑っていた。
「短期集中・・・という訳ですね。がんばらなきゃ。試合が、近いですもんね。」

「ああ。皆、そろそろ気合をもりたてなきゃぁいかん。」
「ふっ。そうですね。」
先生の笑いが、私にもうつってしまった。
ふっと横を見たら、中野がいた。その瞬間サイダーがあふれてしまって、また私の顔は赤くなっていってしまった。中野は、私には気が付かなかったみたいだったのでホッとした。中野――――いつになったらきずくかな――――？
少しうきうきした気分で、後輩の操に話しかけた。
「操ー。あのさ、中野のことは言っちゃだめだよ。絶対に。」
「もちろんですよ。」
「中野の、メアドしりたいんだよね。でも、先輩に聞く勇気ないし。」
「大丈夫ですよ。あの、弱々しい中谷（なかや）先輩とかは？」
「わからないね。うん！がんばってみるね。ところで、操の好きな人って誰？付き合ってるんでしょ。だれよー。」
「いずれ分かりますよ。」
操は、それだけいうとすぐに後ろを向いて防具の準備をしてしまった。何か、隠しているのではないかという思いも浮かんできたが言うのはやめた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4637c/

花。時々、大嵐。

2011年1月27日06時05分発行